

仏教的禪とキリスト教的見神

第二十四回生 トビアス・エッカーター (Tobias Eckertner)

木を割りなさいー私はそこにいる。

石を持ち上げなさい。そうすればあなたがたは私をそこに見出すであろう。

『トマスによる福音書』 七七・二f

これは『トマスによる福音書』に伝えられているイエスの言葉である。深い意味を持った、しかしとても謎めいた言葉で、初期キリスト教に属するあるグループの霊的実践と世界像とを表している。一読しただけでは、木を割ったり石を持ち上げたりすること、内的成長や絶対者との邂逅という望みとはほとんど関係がないように思われるかもしれない。しかし繰り返し読んでみると、その意味が明らかになる。すなわち、ここでイエスは極めて個性的で独特な言い回しを用いて、次のようなことを言っているのである。

あなたがたが探し求めているものはあなたがたから遠く離れてはいない。目を開けよ！

あなたがたは私や天の父を、まさにあなたがたの足元に見出すであろう！

このことはイエス自身の人生を見れば明らかである。イエスは大工、現在で言えば建設作業員であり、彼はその職を育ての父であるヨセフから受け継いだ。彼はここで建築現場での日常的な仕事―石運び、木割り―について語っており、そこには日常（俗）と非日常（聖）の区別は存在していない。正にいまここに神、神の力、神の国は臨在しているのである。

この言葉が語られた当時既に、慌ただしい生活のただ中で、この根本的な神の臨在をあらゆる感情、印象、考えのなかに発見し感じ取ることは、聴衆にとって簡単なことではなかったはずである。そしてその後数百年に亘って、霊的な人間は絶えず、自身がこの霊的な道を決然として歩むこと、そして他の人をそれに参与させることを課題としてきたのである。

この、区別なく物事をとらえるという修行は多くの場所で『マタイによる福音書』五・八を意識して、見神（ラテン語 *Contemplatio dei*）と呼び慣わされている。それでは、この見神の修行とは具体的にどのようなものなのだろうか¹。むしろん統一的な規格があるわけではないため、ここでは筆者の個人的な経験を簡潔に述べてみたい。

修行をしようとする者は気持ちを静め、自分の意識をいまここにある具体的な存在に集中する。その際浮かんできるとする考えや感情を抑圧する必要はないが、それについて思いを巡らせたり、深めたりすることはしない。それについて考え始めたり取り扱ったりせず、煩わされることな

く流すことを試みる。初心者にはこれを実践することは非常に難しく思われるかもしれない。というのも、しばしば考えが自然とまとわりついてきて、簡単に白昼夢へと陥ってしまう危険性があるからである。滅多にないことではあるが、心がそれに慣れていない場合、常に自身へと押し戻されることに耐えられず、軽いパニック状態に陥ることもある。身体がいつもと違った状況から脱出しようと、非常に強い痒みや運動衝動といった密かな警戒信号を発することも頻繁に起こる。たいていの場合、このような問題は経験を重ねるにつれて少なくなっていく。心身が新しい在り方に慣れていくのである。上述したようなケースでは、自身の呼吸に集中することが、改めて心を落ち着け、緊張をほぐす助けとなるであろう。

以上、簡潔な描写ではあるが、見神がどのように行われるかをまず紹介するには十分であろう。禅の修行を行ったことがある者はこの時点で、少なくとも最初の印象では見神と禅の修行方法が大いに似通っていることに気が付くであろう。

以下では、更に一步進んだ段階でも両者に否定しがたい共通点があることを示す例を二つ挙げる。しかしその前に、ドイツでの状況に関して簡単に付記しておこう。禅は既にここ数十年来、プロテスタントおよびカトリックのキリスト教徒によって熱狂的に実践されている。それはとりわけ、宣教師として日本に長年滞在したイエズス会士フーゴ・ラッサール (Hugo Lasalle

St. 日本名、愛宮真備。一九九〇没）が、禪をキリスト教信仰に役立つ修行と見なし、ドイツの、とりわけキリスト教的な環境において修養会を開催したことに負っている^③。異論の余地はあ
るものの、ベネディクト会士ウィルギス・イエーガー（Willigis Jäger OSB）、牧師のグンドゥラ・
マイヤー（Gundula Meyer）ほか多くの教師が今日もなお、キリスト教的な環境において禪を
実践している。

これらの禪の実践に異論が全くないわけではない。ここ数年も、キリスト教的禪の実践の正
当性を巡って、キリスト教神学者によっても、様々な流派の仏教学者によっても常に批判的に
議論が戦わされてきた^④。この論争の詳細は我々のテーマと直接関係はない。しかし筆者自身
が禪と見神の両者から影響を受けているため、この問題についてはあるが言及して
おくことが重要だと考える。

私見によれば、多くの牧師、司祭、仏教の僧侶が、このような異なった宗教にまたがるよう
な現象に直面するとお手上げ状態になってしまうのは、他の宗教に対する知識の欠乏だけではな
く、他の宗教を説明しようとする際に用いられる、排他主義（Exklusivismus）、包括主義
（Inklusivismus）、多元主義（Pluralismus）という教義学的なモデルの不十分さに原因がある^⑤。

このモデルは具体的な宗教における実践方法や理解に基づいているのではなく、現実にはそれに相応するものが存在せず、恣意的に解釈できる抽象的な宗教概念を前提としている。そうではなく、例えばイエズス会士フランシス・X・クルーニー (Francis X. Clooney SJ) が提唱している比較神学的なアプローチが有効だと筆者は考える。比較神学とは、他の宗教を自身の伝統に照らして、自身の宗教を他の伝統に照らして理解しようとする研究方法である。これは学問的な方法論においても用いられる内省的な手法ではあるが、客観性を保持することは始めから放棄しており、主観的であること、またそのような試みに限界があることに自覚的である。

「通常、二つの事実——テキスト、イメージ、儀式、教義、人物など——を並べて互いに比較してみようという気にさせられるような、興味深い類似点に直感的に気付くことから始まる。両者を何度も見比べ……最後には、我々は自身の異なった姿を見るようになる。それは直感的に明らかにされた次元での我々自身の姿であり、比較という論理を用いなければ立ち現れることのなかった姿である。」⁵⁾

本稿では中国の禅僧、臨済（八六六没）の言行録から、これまで見神と関連付けられてきた短い章句を二つ紹介してみたい。臨済を採り上げるのは、彼が禅の二大宗派の一つである臨済

宗の開祖として崇められているからであり、また筆者が日本において彼の著作を学ぶ機会を得たからである。

道流、心法は形無くして「∴」 山僧の見処を取らば、「∴」 菩提涅槃は懸驢楸の如し^⑤
修行の道、心の本性には形がない。山僧^⑥の視点から見れば、菩提涅槃は驢馬を杭に結びつける縄のようなものだ。

臨済がここで述べているのは、目覚めた人の見地からは、あらゆる存在の真如に、概念や何らかの把握可能な形態を当てはめることは不可能だ、ということである。仏教の悟りの究極の理想である菩提や涅槃でさえも、修行者の心がそれに囚われてしまうならば危険なのである。驢馬は言葉と考えとによって繋がれている素朴な意識であり、世界とその真如の姿で出会うことができる可能性を秘めているのである。禅修行における抽象性はこれに基づいており、それは見神に関する否定神学^⑦の考え方と似通っている。しかしながら両者における否定の方法は大きく異なる。否定神学にとって否定は感嘆とより大きな神賛美に繋がるものであるが、臨済にとって否定は多くの場合、自身の弟子に衝撃を与え、新たな考え方へと導くために仏教が崇拜する事柄を低めるものである。とはいえ、この二つの伝統はどちらも、自身を完全に概念的

な考えから解き放とうとはしていない。それはただ、限界を自覚したうえで、それにふさわしい範囲で用いられるべきなのである。

云く、赤肉団上に無位の人有りて、常に汝等諸人の面門より出入す。

(臨濟) 曰く、この赤い肉塊には地位も名も無き真の人が宿っており、あなたがたの顔を通って絶えずあなたがたに出入りしている。

赤い肉塊とは、肉、骨、血から成る壊れやすい形成物であり、短い時間のみ存在する人間の肉体を非常に醒めた目で描写した表現である。しかし修行者は自身の肉体性から離れて精神性へと逃れるべきではない。そうではなく、地位も名も無き真の人、すなわち人間の形をとった絶対的な真理が初めから自身の中に宿っていることを感じ取り、認識するべきなのである。臨濟は他の多くの箇所においても、この根本的な確信を弟子たちに伝えようと格闘している。臨濟によれば、弟子たちは決定的なものを既に自身の中に宿しているにも関わらず、外に目を向け、世界中を駆け回っている。彼らはブツダや聖典、有名な師などに救いを求めるが、心が休まることはない。さらに別の箇所で臨濟は弟子を、生まれつき備わっており、決して無くなることなどないにもかかわらず、生涯頭部を探してさまよう人間に例えている⁹⁾。臨濟のこの教

えは比較神学における神成理解とある程度一致している。すなわち、神は既に我々の内と周囲に臨在している。問われているのは、我々がこの臨在とどのように関わるかということなのである。しかしこの点における臨済と比較神学との最も大きな違いは、絶対的な存在が人間の中に宿るに至った過程をどのように理解するかということであろう。禅仏教においては全てのもものが初めから区別なく仏性、すなわち真の自己に目覚める可能性を秘めている。キリスト教における見神の伝統では、神の内在と神成は具体的な歴史的出来事と結びつけられている。一つは損なわれた神の似姿 (imago dei) としての人間存在を回復させたイエス・キリストによる救済行為であり、もう一つは志願者がキリストの死と復活に与ることによって、新たな存在へと組み入れられる洗礼である。もちろん仏性という考え方と、人間の内に臨在する神という考え方は全く異なった理解や象徴と結びついているが、構造の類似を指摘することは不利益にはなるまい。どちらの場合も修行にあたって、この存在を概念のレベルで捉えることなく、瞑想によって自身をその存在へと開くことが重要なのである。しかし禅においては修行にあたっての抽象性に、見神においては人間の内に実際に臨在する絶対者への信仰に重点が置かれていると言えよう。もちろん、禅と見神の構造的・実践的なレベルでのより深い繋がりを明らかにするような、他の言い表し方もできるのであろうが。

筆者は、本稿で述べたような禪と見神との繋がりが、ブツダの弟子たちとイエス・キリストの弟子たちを堅く結びつける多くの糸の一つとなることを祈っている。また、両者が驚嘆と喜びをもって互いに学び、すべての人の幸福に資する両者の友情が強まり、深まることを祈っている。

(1) 筆者はつい最近まで、ハイデルベルクで見神グループを主宰していた。

(2) Bayreuther, Sabine, S.238ff 参照。

(3) 様々な立場からの主張についてはドイツ仏教同盟 (Deutsche Buddhistische Union, DBU) の “Lousblitzer” (1/95) 参照。議論の状況は、この時から根本的に変わっていない。

(4) Barth, Hans-Martin, S. 39-65 参照。排他主義：自身の宗教が正しく、その他の宗教は誤っている。包括主義：他の宗教を自身の宗教を手掛かりにして説明し、分類し、評価する。多元主義：あらゆる宗教は等しく真であり、善である。等しく妥当性を持つ。

(5) Rinzai Roku, Shuji I, S.39f

(6) 法。サンスクリット語では Dharma。教え、あらゆる存在の総体、個々の実在、法律を意

味する。ここでは本性という訳語を採用した。

(7) 臨濟は自らをこのように称した。

(8) 神を肯定的な述語で描写することを放棄した神学。例…神は光ではなく闇である。なぜなら神は光を超えた存在であるからである。神は存在する者でも存在しない者でもなく、あらゆる範疇を超えた者である。

(9) Rinzai Roku, Shūji VIII, S.123 参照。